



古代マケドニアと 南バルカンの自然

12日間

2023年9月14日~9月25日





1日目 9月14日(木) 羽田空港 → (イスタンブール)

羽田空港で11名様にご集合いただき、添乗員の中村と共にからターキッシュ・エアウェイズで出発。12時間半以上かけてイスタンブールへ。機内はシルバークのためか数々の団体ツアーを含めて満席でした。

ターキッシュ・エアラインズ199便 羽田空港 21:50頃 → イスタンブール空港へ(翌日)

《機中泊》

2日目 9月15日(金) → イスタンブール → スコピエ 晴れ

予定よりも少し早い5時にイスタンブール到着後、広い空港内をずーっとずーっと歩いて乗り継ぎ。以前はこんなに歩かなかっただけ、こんなルートを歩いた記憶もないと思っていたら、コロナ禍前の2019年4月にそれまで国際線旅客の中心であったアタチュルク空港から黒海に面した新空港・イスタンブール空港が全面開業していました。知らなかったです…。スコピエはすぐそこなので1時間少々の飛行。機内食の提供がとてもせわしく感じました。

ターキッシュ・エアラインズ1003便 イスタンブール空港 7:20頃 → スコピエ空港 7:45頃

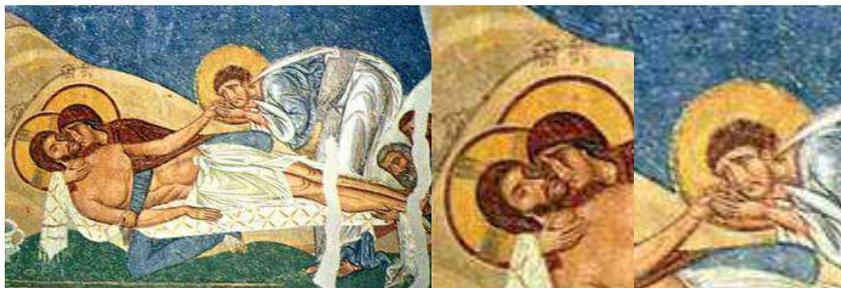
こじんまりとしたスコピエ空港に到着後、スムーズに入国、スーツケース受け取りを済ませ、バス運転手のイリアさんと合流。うっかり両替するのを忘れてしまっただけで済みませんでした。可愛いサイズのバスに乗り込むとマイクが無く、少しもたもたしましたが出発。ホテルでガイドのマリーナさんと合流してスコピエの観光を開始。まずはスコピエ南西のヴォドノ山の中腹に建つ聖パンテレイモン修道院へ。

聖パンテレイモン修道院はスコピエの郊外約7kmのネレツィ村にあり、健康の守護聖人である聖パンテレイモンに捧げる教会として、1164年当時のビザンティン皇帝の息子によって建てられました。1555年の地震で天井のドームが崩落し、フレスコ画が描き直されましたが、他はほぼ12世紀当時の壁画が残されています。注目すべきは「嘆きの聖母(ピエタ)」(左側の壁画)で、磔刑に処せられ絶命した我が子イエスを抱きかかえ、嘆き悲しむ表情は、それまでのビザンチン時代特有の「厳粛」で「無表情」なものとは全く異なったもので、14~16世紀にイタリアから始まったルネッサンスよりも200年早く先取りしたものと云われています。小さいながらも見応えのあるフレスコ画の数々があり、写真が撮れない事が残念でした。イエスの横で嘆く人物が聖パウロというご案内は誤りで、聖ヨハネでした。(本来はいけない事ですが、写真はインターネットより流用しています)

修道院の概観



わが子、わが師を悼む表情が素晴らしい



悲しみに顔を歪める二人

バスに戻ってムスタファ・パシャモスクへ。ドアには大きな鍵がかけられていて入場はできなかったため、外観のみ見て、敷地内を軽く一周しました。ここは1492年ムスタファ・パシャによって、キリスト教の聖堂の跡地に建設された、バルカン半島に現存するオスマン・トルコ時代のモスクとしては最大規模のモスクです。高さ47mのミナレットは1963年の大地震で傾き、修復工事が行われました。因みに、マケドニア国民の70%はキリスト教(マケドニア正教)を、30%はイスラム教を信仰しています。

ここから昼食を終えてホテルに戻るまでずっと徒歩で観光しました。ムスタファ・パシャモスクを後にして、まずは丘の城塞(カレ要塞)へ。標高280mの丘の上にあり、ビザンティン帝国皇帝ユスティニアヌス1世が6世紀に建造しました。現在の城塞はオスマン時代に造営されたもので、城壁の一部と見張り塔が残るだけの廃墟の様相。しかしその昔は城塞内が街ようになっていたのです。要塞からは旧市街と新市街を分けて流れるヴァルダル川が眺められました。北マケドニア国内最長の川で全長388km、ギリシャ国境を越えてエーゲ海に注いでいます。ヴォドノ山の上の十字架は2000年に建設されたミレニアム・クロスです。

要塞から下って行くとスコピオの旧市街に入っていきます。お土産屋、カフェ、レストラン、古い建物の数々が並び立ちます。少しのフリータイム中に両替を済ませて、トルコ式公衆浴場(ハمام 現在は国立美術館)、フィリポ2世像、オリンピア像を見ながらヴァンダル川へ。橋のたもとにはキリル文字考案者の4人の像が立ち並んでいました。橋を渡ると新市街。巨大なアレクサンドロス3世(大王)の像が建つのはマケドニア広場。近くにはスコピエ生まれのマザーテレサ記念館があるので立ち寄ってからショッピングモールを通してホテルへ。

ムスタファ・パシャ・モスク

要塞の後方にミレニアム・クロス

ダウト・パシャ・ハمام(美術館)

フィリポ2世像



アレクサンドロスを身篋ったオリンピア像

キリル文字作成に貢献した4人の像

父の像よりも巨大な像がある広場



ホテルでは既にお部屋の準備が整っていたのでチェックインだけ済ませてレストランへ歩いていきました。Old House という名の有名レストランでたっぷりの前菜とミックスグリルに満腹になりました。後日、この時に北マケド

ニアの大統領がお食事に来ていたと知らされました。本当に有名なですねー。

午後はフリータイム。モールの中のスーパーマーケットでスコピエ市民の食生活を垣間見て、更に足を延ばして博物館見学に行かれる方もいらっしゃいました。まだまだお腹が減らない18時半よりホテルで夕食。食事をキャンセルする方、寝過ごしてしまう方など、ツアー開始初日らしい晩餐でしたねー。メニューはトルティーヤ、サラダ、チキンソテー、ティラミス。全体的にボリュームを減らしてもらうようお願いしていましたが、それでも食べられないくらいのも量でした。長い一日で本当にお疲れ様でした。ゆっくりお休みください。

サラダ、チーズ、燻製肉、数々の前菜



ミックスグリルも種類豊富で美味



トドメのデザート もうお腹が弾けそう



《 スコピエ / ホリディ・イン 泊 》

3日目 9月16日(土) スコピエニマトカ渓谷ニテトヴォニマヴロボニオフリド 晴れ

本日はスコピエから北西部、アルバニアとの国境近くの町や国立公園を観光しながら南西部のオフリドへと移動する一日です。まずはスコピエから約20kmのマトカ渓谷へ。駐車場から20分程(他の観光客と先を争うように)歩いて、ボートに乗り込むと20分ほど湖を進んでフレロ鍾乳洞へご案内。この辺りは約500万年前の地殻変動により、かつては浅い海だった頃に堆積した石灰層が隆起してできたカルスト地形だそうです。鍾乳洞が3つあり、そのうちのひとつに入ってみました。私たちが観光できるエリアは入口から50mくらいまでですが、鍾乳洞自体はその奥にもずっと続いているのです。水中にある鍾乳洞の入口が見える、というので楽しみにしていると「亀裂」程度の穴。はあ〜？笑ってしまいましたね。同じルートに戻るとびっくりするくらいの観光客がボート待ちをされていて、早めに到着しておいて本当に良かったと胸を撫で下ろしました。

カルスト地形が両側に続く



分かりにくいですが鍾乳洞内部



マトカ渓谷



マトカ渓谷から更に西進し、アルバニア国境近くのテトヴォへ。ここは14世紀末よりオスマン帝国の支配下でイスラム教徒が増加し、現在もアルバニア人(イスラム教徒)の方が多い町です。1438年に建設されたモスク シャレナ・ジャミヤを見学しましたが、言われないとモスクとは思えないお金持ちの邸宅のような建物で、外側も内側も装飾的な美しいペインティングが施されていました。このモスクはテトヴォに住む裕福なメンスーレとフルシデ姉妹によって建てられたそうですが、何百年も先の芸術を先取りしたようなデザインを見ると、姉妹は伝統にとらわれないセンスの持ち主だったのでしょね。火災によって一部焼失し、1833年にアブドゥルラフマン・パシャによって改修が行われました。焼けてしまったのならば彩色デザインは19世紀のものと思うのですが、マリーナさんは、オリジナルの彩色を補修しただけであると説明されていました。ここから更に1時間走り、マヴロボ国立公園内のマヴロボへ。

なんと印象的な姿のモスク



メッカのカーバの神殿が描かれていました



ため息がでるような素晴らしい内装



マヴロボ到着後、中世風の衣装を着用したスタッフが登場するレストランで昼食。メニューはサラダ、羊の厚切りチーズ、たっぷりのチーズがかかったポークとキノコの煮込み、トレスレチェケーキ（3つのミルクケーキという意味の劇甘ケーキ）今日も満腹の満腹です。

厚切りチーズが1人3切れ、食べれません



一見グラタン ポークゴロゴロ



一口で甘さにノックダウン



食後は聖ヨハネ・ピゴルスキー修道院に向かいます。腹こなしには十分の傾斜がある坂道をゆっくり20分ほど歩いてようやく到着。修道院は洗礼者ヨハネに捧げられており、イコンの伝説の話が残っています。曰く、第一次ブルガリア帝国のサムエル王の時代にピトラ山の麓に一人の隠修士ヨハネが修行をしていると、森の中で燦然と輝く光を見つけ、近寄ってみるとそこには聖（洗礼者）ヨハネが描かれたイコンがありました。その聖なるイコンを納めるための聖堂を建てたのが修道院の始まりなのだそうです。教会の中に入ると、北マケドニアの傑作と讃えられるイコンスタシス（聖壁）があり、これは1830年から5年かけて、ペトロ・フィリップポフスキーとマルコ・フィリップポフスキー兄弟によって製作されました。胡桃の木を使い、旧約聖書、新約聖書からのテーマが彫られています。写真撮影が出来ないので給葉書を撮影しました。下の写真がそれです。



隠修士ヨハネはここで光を見、イコンを発見



隠修士ヨハネの聖遺物



イコンスタシス「最後の晩餐」



2階部分が教会



教会の外にもフレスコ画がびっしり



何か綺麗だったのでパチリ



バスに戻り、山道を走り抜けてオフリドへ。オフリドでは2泊します。宿泊ホテルは町の中心から南に約7km、オフリド湖に面したリゾートホテルでした。夕食はホテルレストランでビュッフェ。広い割には内容が薄いお食事でしたが、果物が豊富だったのは嬉しかったですね。

《 オフリド / ベルビュー泊 》

4日目 9月17日(日) 終日オフリド観光 晴れ 午後は雲が多くなる

本日はユネスコの複合遺産（自然遺産と文化遺産の両方。1980年）に登録されているオフリドの観光です。オフリドはかつて365もの教会があり「マケドニアのエルサレム」と呼ばれた時代があったくらい教会が多い所です（現在では70ほどですが、十分多いと思います）。10世紀末から11世紀にかけてブルガリア帝国の首都であり、そのため大主教座が置かれていて、現在でもマケドニア正教会の大主教座が置かれている、と聞くと納得です。

城壁のアップーゲートでバスを降りて徒歩観光の始まり。旧市街を囲む城壁の長さは3kmで、古い部分はローマ時代にさかのぼります。最初は「神に祝福された聖マリア教会」という長々しい名前の教会へ。ここからはサミュエル城壁がよく見えました。教会の創建は1295年ですが、現在の建物は19世紀に13世紀の建物を取り囲むように増築されました。祭壇上のドームには主教が祝福の際に行う儀式の様子が、入口上には「聖母マリアの昇天」の場面が描かれていました。天使もイエスも皆悲しみの表情を浮かべています。

続いて古代劇場跡へ。現在までに分かっている限り、北マケドニアで一番古いこのギリシャ風の劇場は紀元前3世紀末に建造され、ローマ時代には修復・改造して再利用、猛獣同士の戦い、剣闘士同士の戦いが行われていました。当時の収容人数は推定3000人ほど。今でも夏には45日間続く音楽フェスティバルがこの劇場で行われています。

街を囲む城壁の「上の門」から観光開始



街を取り囲む城壁



神に祝福された聖母マリア教会



至聖所のドームのフレスコ画



入口のすぐ上のフレスコ画 聖マリアの昇天



古代劇場



家々の間を歩き、聖クリメント教会（または聖パンテレイモン教会。聖クリメントが聖パンテレイモンに捧げて建てた教会）を遠望しました。教会の周辺からは様々な時代の遺跡が見つかり、そのひとつに聖クリメントが造った神学校があります。聖クリメントは聖ナウムと共にキリル文字を作った人物で、後に初代オフリド総主教になった人物です。松林の急坂を下っていくとオフリド湖の絵になる眺めのポイントに到着。眼下には聖ヨハネ・カネオ教会がオフリド湖を背景に佇んでいました。教会の建設年代は定かではないそうですが、13世紀（1280年）より存在していたと考えられています。カネオの名は丘の下の漁村の名前です。聖ヨハネは12使徒でありヨハネの福音書を書いた聖ヨハネの事。オスマン時代17~19世紀にはほとんど使われなくなっていたために1889年修復されましたが、フレスコ画の状態は良くないため外観を眺めるだけにとどめました。

教会を後にしてオフリド湖畔をのんびり歩いていると9月半ばですが、まだまだ大勢の観光客が日光浴と湖水浴を楽しんでいる様子が見えました。暑い、暑い時間帯でしたから歩きながら羨ましく眺めてしまうのでした。

最後に訪れたのは聖ソフィア教会。ブルガリア帝国サミュエル王時代の11世紀初頭に建造された知恵の女神ソフィアに捧げられた教会で、当時はローマ帝国の首都コンスタンティノープルの大聖堂に次いで重要な聖地とされていたそうです。所々に見られる古い部分は6世紀の初期キリスト教会のバジリカです。またオスマン時代にはお決まり通りモスクに転用されていました。中に残っているフレスコ画は11~13世紀と非常に貴重なものです。

聖クリメント教会



聖ヨハネ・カネオ教会 オフリド湖の美しさと讃えられています 下からの眺め



透明度抜群のオフリド湖で泳げて羨ましい



聖ソフィア教会 モスク転用時は塗り潰されていたフレスコ画が再現

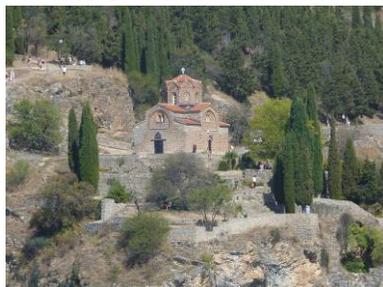


暑い中の徒歩観光が終わり、旧市街の広場に近い Belvedere レストランにて昼食。メニューは毎度のサラダ、オフリド近郊で獲れたコランというマスのグリルとラヴァヤニというシロップをたっぷり含んだ甘い、甘いケーキ。

食後はオフリド湖クルーズを約1時間楽しみました。桟橋からまず聖ヨハネ・カネオ教会方向へ。今度は下から教会を眺めました。その後湖の東側へ。かつてユーゴスラビアを建国したチトーの別荘の横を通過し、私たちが宿泊しているホテルが遠くに見える辺りでUターンして戻りました。よいお天気でのんびりと湖と周辺の景色を堪能しました。



生臭さがない美味しいマスでした



今度は下の方から教会を望む



碧く美しい湖とオフリドの街

街のスーパーマーケットでお菓子やワインを購入してホテルに戻りました。夕方 4 時半には戻れたのでホテル前の湖でゆっくりしていただけたかと思います。夕食は昨夜と同じピュッフェ。

キリル文字

今日の昼食を食べた広場には4人の像がありました（スコピエの石橋のたもとにもありました）。彼らは、ギリシャ文字を基本にキリル文字の原型のグラゴール文字をつくったといわれる聖キュリロスと聖メトディオス兄弟の像と、その文字をキリル文字（現在のスラブ圏で使用されている文字。キリルは師匠であるキュリロスに由来）に発展させた二人の弟子の聖クレメンズと聖ナウムの像です。

《 オフリド / ベルビュー泊 》

5日目 9月18日(月) オフリド=ピトラ 晴れ

本日はホテルより一旦オフリド湖沿いに南下して聖ナウム教会を訪れてから東に向かい、アレクサンドロス大王の父であるフィリッピ2世によって造られたヘラクリア遺跡を見学しました。

ガイドのマリーナさんが住む村でマリーナさんと合流し、走り出すとすぐにバスは止まりました。湖畔から湖底にかけて新石器時代から鉄器時代、ローマ時代に至る居住層が見つかったそうで、鉄器時代の集落を再現したものが見られました。湖底に杭を打って浮島を造る技術に驚きました。そのまま教会へと向かいます。

聖ナウムはキュリロスとメトディオスに従ってモラヴィア（現チェコ）へのスラブ語と正教の布教に付き従った弟子のうちの1人です。その後この地に戻り、主教になったクレメンズと違って彼はこの場所で生活し、900年頃に大天使ミカエルとガブリエルに捧げる教会を建設しましたが、その後910年に亡くなり修道院に埋葬されました。教会はオスマン帝国時代に破壊されましたが、16世紀から17世紀にかけて再建されています。既に大勢の観光客や参拝客が訪れていて賑わっていました。教会の右の小さな礼拝堂は聖ナウムの墓所で、墓石に耳をあてると今も心臓の鼓動が聞こえるとか。耳を当ててみると確かに、微妙ですがとっくん、とっくんと聞こえました。不思議です。小さな教会内部には聖ナウムの奇跡（農作業のための牛を食べた熊が牛の代わりに農作業をする場面が有名）や、旧約聖書、新約聖書の場面が描かれたフレスコ画が美しく残っていましたが、いつものように撮影禁止。フレスコ画は再建後のものです。教会の400mくらい先はもうアルバニア。テラスからはアルバニアの集落が見えました。オフリド湖には1万もの湧き水ポイントがあり、それが透明度の高い湖を形成しているのですが、教会の近くにもたくさんの湧き水ポイントがあり、それらが川となって湖に注ぎ込んでいました。見学後は来た道に戻り、東へ進路を変えてヘラクリアへ。

鉄器時代の集落跡を再現したもの



聖ナウムの奇跡物語の一場面



一番手前の張り出しが聖ナウムの墓所



左の緑の突き出しと奥の白っぽい建物はアルバニア 分かり難いですがとても綺麗な湧き水が池をなし、川となって湖に注ぎ込む



ヘラクリア遺跡は古代マケドニア王国のピリッポス2世によって紀元前4世紀に建設された都市ヘラクリア・リンクステスの遺構で、名前の由来はマケドニア王家の守護神ヘラクレスと、野生のネコのリンクスがたくさん棲息する所だった？からとの説明でした。古代エグナティア街道沿いの重要な街でしたが、5世紀に東ゴード族に略奪され、6世紀には地震にみまわれて次第に人口が減っていった上にスラブ族の侵入が始まり衰退していきました。現在、遺跡内で見ることができるものは当時の10%のみで、紀元前168年にローマ帝国に支配されて以降から4世紀にキリスト教が国教となり、その際に造られた教会跡や司教館に限られます。遺跡専属のガイドのテオドールさんの話ではピリッポス2世時代の遺跡は背後の高台(アクロポリス)にあるそうですが発掘はさほど進んでいないようでした。しかし話は(北)マケドニアのアイデンティティに関わる話へと逸れて、大バジリカのモザイクの説明も自分たちの先祖であるマケドニア人の自然を愛する気持ちがモチーフになっている、など少々偏りが感じられるもので、結局話が長いだけでよく分からない見学となってしまい申し訳ありませんでした。一応見たのは、小バジリカ、浴場、大バジリカとモザイク、博物館を抜けてローマ時代に建設された劇場です。

列柱通りと小バジリカ



魚もキリスト教を表すモチーフです



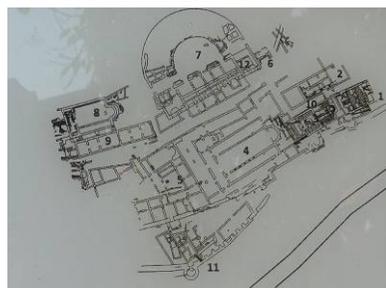
草木、花、動物を愛するマケドニア人がそれらをモチーフにしてキリスト教を表しているとか…



ローマ劇場



実はこんな立派な遺跡だったので…



暑さと長い話に疲れてしまいましたが、宿泊するビトラはすぐ近く。ホテルの駐車場でバスを下車して歩行者天国を歩いて昼食レストランの Milenium へ。メニューはトマトたっぷりのマケドニアサラダ、カリカリのチーズフライ(美味!）、ポークとキノコ煮込み、トリレチェケーキ。ここでマリーナさんとお別れ。そしてホテルまで戻って運転手のイリアさんともお別れとなりました。因みに宿泊したのは下車したエピナルホテルの少し先の、エレベーターもない、とても狭いお部屋の古びたホテルで少々がっかりでした。夕食時間まではフリータイム。北マケドニア第二の都市ビトラの目抜き通りである歩行者天国のお店をブラブラしたり、鉄道駅まで散歩してお過ごしいただきました。夕食はエピナルホテルのレストランでサラダ、ポークソテー、チョコレートケーキでした。北マケドニア最後の夜です。



《 ビトラ / シロクソカク泊 》

6日目 9月19日(火) ビトラ==国境越え==テッサロニキ 晴れ

本日は国境を越えてギリシャに入り、アレクサンドロス大王ゆかりのヴェルギナとペラを観光し、テッサロニキに至る1日です。レストランの営業開始時間が私たちの出発よりも遅いので特別に早く開けてもらったら、ハムやチーズ入りの立派なおムレツが出てきて朝から早速お腹いっぱいになりました。また、バスが特大サイズになり、運転手さんはペターさん。ソフィアまでずっと一緒です。運転技術はピカイチでしたが、私たちが訪問する場所が一般的ではないのでペターさんも道を間違えたり迷ったり、珍道中の後半の旅が始まりました。

ホテルを出てすぐに国境に到着しましたが、バスから降りることなくパスポートを渡してスタンプを押してもらい返却されるだけの簡単な手続き。2つの国境を越えるのに30分少々でした。エデッサの滝でお手洗い休憩をしようと思いましたが、一方通行やバスでは入れない狭い道に阻まれ苦労しながら到着。しかしあまり大した眺めではなく、しかも滝の途中部分でしたから？？の立ち寄りとなってしまいました。さらにヴェルギナのレストランもなかなか見つからず、苦労の果てによく到着。Filipion レストランで前菜色々、牛肉煮込み、ラヴァニケーキ（出た!!シロップたっぷりの甘い、甘いケーキ!）の昼食。ワインは水で薄めた味だったようですが、暑い夏、ギリシャではそのようにしてワインを飲む習慣があるそうです（後日ブルガリアのガイドのマリーナさん談。しかし中村の経験ではドイツでも夏場には薄めて飲むのが一般的でした）。

レストランで合流した大柄のガイドのマリアさんと共にヴェルギナの見学スタート。ここにはピリッポス2世のものと考えられている墳墓があります。日本の古墳のようなお饅頭型の墳墓の中は屋内博物館さながらの構造で、4つの王族の墳墓と副葬品の数々が展示されているという非常に画期的な展示の仕方でした。最初の墳墓は盗掘されていたので誰のものか不明ですが、中にギリシャ神話の「ペルセポネの誘拐」の壁画があり、躍動感溢れる素晴らしいものでした。1号墳からは女性と幼い子供の骨が見つかりましたが、これは王族の親子と推測されているそうです。マリアさんの話によるとピリッポス2世の複数いた妻の一人とその娘（2人いた娘のうちの妹）との事。ちなみにもう一人の娘は後にカッサンドロス（アレクサンドロス大王の死後に大王の母オリンピアや大王の妻ロクサネと息子など大王の近親者を次々に殺害した人）と結婚したと話していたので、大王の異母妹であるテッサロニカの事であると分かります。

発掘当時に未盗掘であった2号墳がフィリッポス2世の墳墓と考えられているもので、その根拠のひとつは長さの違う脛当て（武具）。過去の戦で脚を負傷した王の脚は長さ違っていたと考えられるからです。最後に発掘された4号墳も未盗掘で、そこからは13歳くらいの少年の骨が見つかりました。これはアレクサンドロスの遺児 アレクサンドロス4世ではないかと推測されています。黄金だらけの副葬品も素晴らしく、充実した見学となりました。

日本の古墳によく似たヴェルギナの墳墓

写真を撮り忘れたので過去の写真を使用



ピリッポス2世の墓

上部にアレクサンドロスの壁画が残る



墳墓内部の模型 複数のお墓が存在



ピリッポス2世の武具の副葬品



躍動感溢れる「ペルセポネ」の壁画



長さの違う脛当て



王の骨を納めた黄金の箱に「イルガ」の太陽



共に埋葬された妃の遺骨を巻いていた金糸の布



装飾に使われた王の顔



ヴェルギナ遺跡

※世界遺産詳細より抜粋

1996年に登録、2007年に登録内容が変更された世界遺産（文化遺産）。

ギリシア北部・ピエリア山麓のヴェルギナ近郊にある考古学遺跡。20世紀にモザイクの装飾のある宮殿跡らしき遺跡や紀元前11世紀以降の300を越す古墳群が発見されている。この地域は紀元前5世紀末にペラに遷都されるまで古代マケドニア王国の首都だったが、その場所は長い間不明とされてきた。ギリシアの考古学者マノリス・アンドロニコスが1977年に発掘した墓がマケドニア王フィリッポス2世（アレクサンドロス大王の父）の墓であると主張したことで注目を集め始めた。この主張とおりだとすると、フィリッポス2世はこの地で暗殺され、その跡を継いだアレクサンドロス大王は、この地を拠点にギリシア全土を統一し、大帝國を築き上げる基礎を創ったことになる。

ピリッポス2世

マケドニアの国王。在位前359～前336。

※「世界史の窓」より抜粋、加筆

ギリシア北方の後進国であったマケドニアを強国に育てた。若い頃テーベで人質として過ごし、重装歩兵密集部隊戦術を学んだという。祖国に帰り権力を統一し、騎兵隊の組織化、長槍で装備した重装歩兵部隊などの軍制を採用し、ペロポネソス戦争後のギリシアの混乱に乗じてギリシア本土に侵攻した。前338年、カイロネイアの戦いでアテネ、テーベなどのポリス連合軍を破り、ギリシア本土の都市国家・ポリスを屈服させた。さらに翌年スパルタを除くギリシア本土のポリスを加盟させてコリントス同盟を結成し盟主としてギリシア支配を確立し、次なる大目標であるペルシア遠征に着手した。

前336年春、ペルシア遠征に向け、重臣のバルメニオンらの率いる先遣部隊を小アジアに上陸させ、次々とギリシア諸都市を解放していった。いよいよ本隊を率いて出発する前に、ピリッポスは娘クレオパトラと隣国モロソイの王子との結婚式を挙行した。初夏の古都アイガイでの祝典はペルシア遠征の壮行会を兼ね、盛大に行われた。ところがその翌日、劇場で行われた結婚披露の音楽競技会の開会式典で、ピリッポスは護衛の貴族パウサニ阿斯に槍で突かれ即死してしまった。あっけなく生涯を終えたピリッポスの東方遠征という事業は、息子のアレクサンドロスが継承することとなった。

ヴェルギナを後にして紀元前5世紀に遷都されたペラへ。まずは博物館を見学しました。アレクサンドロスが生まれたペラの町の遺跡自体は発掘がほんの一部しかなされていませんが、そこからの発掘品を展示する博物館です。この目玉はギリシャ時代の邸宅から発掘されたモザイクの数々。「アレクサンダー大王のライオン狩り」や「テセウスの略奪」など史実からギリシャ神話までテーマも幅広く、モザイクで陰を表現したり躍動感が生き生きと感じられ、2千数百年前の芸術性の高さに驚きました。

ライオン狩り 左がアレクサンドロス



ヒョウに乗ったデュオニソス神



特殊写真展示ながら躍動感が感じられる



本日最後の見学はペラの町の遺跡へ。遺跡自体は特に残っているものは少なかったですが、博物館に展示されていた特殊写真のモザイクのオリジナルがあったのはなかなか見応えがあったのではないのでしょうか。『テセウスのヘレネ略奪』はあまり知られていないギリシャ神話ですが、非常に大きなものでした。



ペラ ※ウィキペディアより抜粋
ギリシャ・中央マケドニアにあるマケドニア王国の首都だった都市遺跡。

紀元前5世紀末、アルゲアス朝の王であったアルケラオス1世によって建てられ、旧都アイガイ（ヴェルギナ）から遷都された。三大悲劇詩人のエウリピデスもこの地で晩年を送ったように、古代ギリシアの文化を積極的に吸収した。

紀元前4世紀にアルゲアス朝のピリッポス2世や、アレクサンドロス3世もペラで生まれた。ディアドコイ（アレクサンドロスの後継者）の一人カッサンドロスにより大規模なインフラの建設が行われ、ペラはマケドニア王国で最も豊かな都市として繁栄を享受することになる。現在発見されているペラの

遺構は大半がカッサンドロスおよびその後のアンティゴノス朝時代に建設されたものである。紀元前2世紀、共和政ローマによって征服され、さらに地震の被害を受けてその繁栄を失った。

遺跡の見学が終わったのは19時前、すっかり遅くなってしまいました。テッサロニキに向かう高速道路の入口に辿り着くまでにまた少し道を迷ってしまいました。20時過ぎには何とか到着できました。

夕食はホテルのレストランでビュッフェ。大変長い一日となってしまいました。お疲れ様でした。

《 テッサロニキ / カブシス泊 》

7日目 9月20日(水) テッサロニキ滞在 市内観光 晴れ

本日は午前中はテッサロニキの市内観光、午後はフリータイムとなります。旅行も折り返し日となりましたので小休止です。といっても、オフリド、ピトラでもゆっくりしましたが。ガイドのマリアさんとはホテルで合流し出発。

まず向かったのはテッサロニキの守護聖人である聖ティモトリオスに捧げられた教会へ。3世紀にティモトリオスが殉教した場所に5世紀に建造された教会。7世紀と1917年の大火で焼けてしまったため、焼け残った建材を利用して再建されたものが現在の教会です。ギリシャでも最大級のバシリカ式聖堂であり、初期ビザンチン建築の代表例として知られていて1988年にユネスコの世界文化遺産に登録されました。中の座席に座って長々と話されたのはテッサロニキの町の歴史でした。その後地下に残る聖ティモトリオスが幽閉されたと言われる古代ローマ時代の浴場の遺構を見て、聖ティモトリオスの不朽体（正教における聖人の遺骸に対する呼び名）が収められた銀の箱をお参りしました。



バスに戻る前にローマ時代のアゴラ（広場）を少しだけ見に行きました。見えている部分だけで当時の半分。残りは建物の下に埋まっているようで、いかに大きな広場であったかがうかがえます。

幽閉されていたとされる地下の浴場



聖人の遺骸が納められた銀の箱



ローマ時代のアゴラ 半分だけ発掘



次にアクロポリスへ。ここは高台になっておりギリシャ第2の都市であるテッサロニキの中心が見下ろせる展望所のようにになっています。ここの城壁の起源は紀元前4世紀のカッサンドロスの時代までさかのぼりますが、現在見える城壁の大部分を造ったのはローマ時代で3~5世紀のもので、見張り台はオスマントルコの時代のもので。かつては約8kmの城壁により完全に囲まれた強固な要塞のような街だったそうですが、近代化するにつれて城壁は壊されて現在は4.3km残っています。高台から見下ろした時に、どこまでが城壁の内側であり、外側であったかよくわかりましたね。建物がぎっしり並ぶのが内側、緑豊かな空間と大学のキャンパスなど大型の建物が並びエリアが外側です。残念ながらオリンポス山は霞んで見えませんでした。

その後は車窓からガレリウス帝の凱旋門（4世紀初頭のローマ皇帝で、凱旋門はササン朝ペルシヤとの戦いに勝利したものを記念しています）とロトンダを見て、白い塔の近くでバスを下車し、アレクサンドロス大王の像の写真を撮ってからテッサロニキ博物館へ。

紀元前に遡る古い城壁です



写真中央の円形の建物がロトンダ



テッサロニキ博物館はマケドニアやテッサロニアの遺跡から発掘された出土品が中心になっており、美しい王冠やコイン、宝飾品、ゲーム道具などさまざまな展示物がありました。昨日、ヴェルギナで見たものと同じような、花や葉の細かい装飾が施された黄金の王冠もありました。

ピリッポスの妻 オリンピアのコイン



金箔を施した壺



女性の石棺の内側に描かれたフレスコ画



ヨーロッパ最古の本（巻物）先進技術で復元



アリアドネとデュオニソスのモザイク



ゼウス、アテナ、アポロン三神の金細工の納骨箱



マリアさんの細かい説明に皆様疲れてしまったのか、振り返ると2, 3名様のみしか見えませんでした。バスで旧市街の有名なレストランエリアに向かい、Kazaviti レストランにて昼食。海の幸たっぷりの美味しいおかずがたくさん出されて大満足でした。ここのお食事が今回のツアー中で一番美味しかったとお声もありました。魚卵のパテ、スッキーニフライ、ムール貝のワイン蒸し、タコの Pasta、アンチョビとイワシ、イカのフライ、チョコレートケーキとアイス。



昼食後は3名様ほどそのまま街に残り、ほかの方々は一旦ホテルへ。近くの鉄道駅まで足を延ばしたり、スーパーマーケットを覗いたり、夕食までのフリータイムをお過ごしいただきました。

夕食は再び街の中心街へ。Dia Taura レストランでは、シーフードブルスケッタ、サーモンのサラダ、サーモンのニョッキ、デザート3種盛りをいただきました。昼食の満足度には及びませんでしたが、シーフードを満喫しました。



《 テッサロニキ / カブシス泊 》

8日目 9月21日(木) テッサロニキニニアトス半島クルーズニカヴァラ 晴れ

本日は、3本指のようなハルキディキ半島の1番東側のアクティ半島(通称アトス半島)に建ち並ぶ修道院群を海上から眺めるポートクルーズを楽しんでいただいてから国境近くの街カヴィラに移動する1日です。

バスを東に走らせてハルキディキ半島へ。今日も残念ながらオリンボス山は霞んで見えませんでした。クルーズ船は、長さ約60kmのアトス半島の西海岸の付け根のウラノポリス港から出航し、往復で約3時間半かかります。半島はギリシャから治外法権的な自治独立を認められているアトス自治修道士共和国がほぼ全域を占めています。

アトス自治修道士共和国 ウィキペディアより抜粋、加筆

ギリシャの中央マケドニア県の南方に所在するギリシャ正教最大の聖地。修道院共同体はギリシャ国内にありながら治外法権が認められている一種の宗教国家。各国の正教会の20の修道院及びケリと呼ばれる修道小屋によって自治がおこなわれています。首都はカリエスで、各修道院の代表とギリシャ政府の代表1人からなる自治政府が運営しています。アトスは正教会の総主教庁であるコンスタンティノープル総主教庁の管轄下であり、現在約2,300人の修行僧が女人禁制のもと、中世より受け継がれた祈りと労働の厳しい修行生活を送っています。女人禁制は11世紀に始まり、家畜の雌さえ禁止する徹底したものです。当時は禁欲的な修道士たちにとって女性とは神に仕えるべき道を迷わせてしまう存在であると考えられていたからです。また、女性を乗せた船は「聖地を汚さな

半島先端のアトス山 2033m



い」ためにアトス半島の岸から 500m 以内に近づくことができません。ただし、これには近年多くの国から差別的であるとの抗議がなされているそうです。最南端にアトス山(標高 2033m)があり、聖山と呼ばれていて、周辺一帯は 1988 年 世界遺産に登録されました。

この地に修道士たちが暮らしはじめたのは 7 世紀頃で、聖地としての隆盛は 963 年に聖アタナシオスがビザンチン帝国の皇帝に免税特権を与えられてメグスティス・ラウラ修道院を創立し、厳しい戒律に基づく共同生活を送る隠修のスタイルを生み出してからで



す。以後続々と大小の修道院が建てられ、11 世紀初頭には 60 を越えた事もあり、修道士の数は最盛期には 6 万に達したこともあるそうです。オスマン帝国の支配下にあっても修道士は正教の伝統を守り、オスマンのスルタン達はアトスに絶大な自治権を認めていました。1829 年にギリシャ王国がトルコから独立してからはギリシャ政府の保護下に置かれ、治外法権を認められた独立の共和国として今日にいたっています。

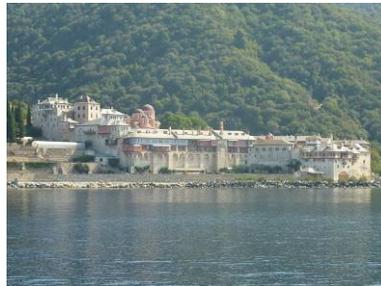
女人禁制でありながらアトス山の守護聖人は「生神女マリア(聖母マリア)」で、伝承によれば、年老いたマリアが旅の途中で嵐に遭いアトスの海岸に避難した際にその美しさに惹かれて自分の所有とし、下船してからアトスの異教の偶像を一瞬にして打ち倒し、この地に祝福を与えたそうです。(随分と勝手に一方的な行為に思えますが…)

12 世紀創建

ドヒアリウ修道院 11 世紀



クセノフォンドス修道院 10 世紀創建



パンテレイモン修道院 ロシア正教会



シモнос・ペトラ修道院 12 世紀創建



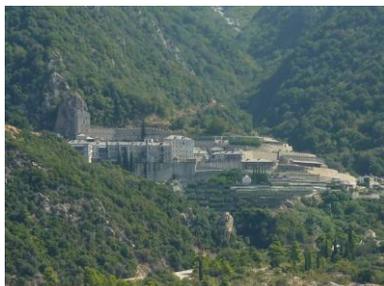
グレゴリウ修道院 14 世紀創建



ディオシウ修道院 14 世紀創建



アギウ・パヴロ修道院 10 世紀末創建



ウラノポリスに戻るとすぐに Lemoniadis レストランに移動し、野菜の前菜 3 種盛り、タラのフライ、ギリシャヨーグルトをお召し上がりいただきました。食後は少しフリータイムをとりカヴァラへ。

途中、船内で会った見ず知らずの方から勧められてスタギラで由来も分からず城壁の写真ストップをしましたが、調べてみると、スタギラはアリストテレスの出身地でした。アリストテレスの父はピリッポス 2 世の専属医師で単身赴任をしており、アリストテレスは 17 歳まで母と姉と共にスタギラで過ごしました。左側のお席に座って

いらっしゃった方はアリストテレスの邸宅跡の空き地が見えたと思います。

出発して 2 時間少々でカヴァラのホテルに到着。エーゲ海に面したホテルでビーチもありましたが、さほど賑わいもなく静かに、のんびりとギリシャ最後の夜を過ごすことができました。夕食はホテルレストランでピュッフェ。



スタギラの要塞



カヴァラ

人口6万人の港町。紀元前7世紀頃に沖合に浮かぶタロス島からの移住者によって造られました。当初は「新しい都市」を意味する「ネアポリス」と呼ばれていました。その後、マケドニア王国ピリッポス2世がこの一帯を支配するようになり、自身の名前を付けたピリッポイを建設。ネアポリスはピリッポイの港として機能しました。また紀元1世紀には使徒パウロが初めてヨーロッパに宣教に来た際に下船した港として知られています。更にフィリッピの戦い以前の紀元前42年にはブルトゥスとカッシウスの基盤となった場所でもあります

《カヴァラ / ルーシー泊》

9日目 9月22日(金) カヴァラ(フィリッピ遺跡) ==国境越え==ブラゴエフグラート 晴れ

本日はピリッポス2世が建設したピリッポイ遺跡を見学してから国境を越えてツアー3カ国目のブルガリアへ入り、南部の小都市のブラゴエフグラートに至る1日です。

ホテルを出発し、ピリッポイ遺跡へ。ここでは歴史的に3つの重要な出来事がありました。

1つは、紀元前4世紀にアレクサンドロス大王の父ピリッポス2世がタロス人の植民市を征服して建築した事。その目的は都市建設により付近の金鉱の開発を促進し、また軍事防衛の拠点とする事でした。ピリッポイは海岸沿いの2つの都市アンピポリスとネアポリスを結ぶ街道を防衛する要地であり、のちにこの街道は古代ローマにより再興されてエグナティア街道となりました。

2つ目は、紀元前42年のローマの内乱時代の末期、ユリウス・カエサルの死後、オクタウィアヌスとマルクス・アントニウスが連合してカエサルの暗殺者ブルトゥスとカッシウスをピリッポイの西で撃破した有名なフィリッピの戦いが行われた地である事。

3つ目は、紀元後49年か50年頃、使徒パウロが幻に導かれてピリッポイを訪れたとされている事。パウロには、シラス、テモテ、恐らくはルカとされる使徒行伝の筆者が同行しており、パウロはこの街でキリスト教伝道を行いました。つまりピリッポイはパウロが初めて訪れたヨーロッパの都市であるとされている事です。

遺跡の入り口でガイドのペルセボネさん(ギリシャ神話の女神と同じお名前)と合流して広い遺跡の見学開始。まずは劇場へ。ギリシャ時代の劇場の典型である円形のオルケストラが残っているのはとても珍しいです。収容人数は7000人とお話。随分多い人数ですが本当でしょうか…。続いて非常に大きな大バジリカを過ぎてかつてパウロが投獄されていたと云われる場所へ。果たしてパウロは本当にこの地に来たのかどうか確証はないのですが、信ずるものは救われる、っていう事で。ここから下の遺跡に移動。途中、古代ローマ時代のエグナティア街道が残っている部分が見られました。轍や滑り止めが刻まれていて当時の往来が目に見えそうです。

続いてパウロの大バジリカ教会と呼ばれる八角形の教会へ。ここではキリスト教が公認された313年の後に建設されていたことがわかるモザイクが見つかっていて、ヨーロッパ最古の教会の1つに数えられます。写真撮影を呼びかけましたが、床のものはレプリカで、本物は博物館に展示されていると分かり、大変失礼しました!その後、多色な大理石が嵌め込まれた床が印象的な公衆浴場と付属の公衆トイレ、イエスキリストを隠語で表すΙΧΘΥΣのマークなどを見て遺跡の見学は終了です。遺跡大好きの中村はもっと見ていたい気分でしたが、多分もう十分でしたね。



1.5 kmに亘り街を取り囲んでいた城壁



円形のオルケストラは本当に珍しい!!



紀元6世紀に建てられた大バジリカ



聖パウロが捕らえられていた牢屋かも



街の中心となる下の遺跡の全景



古代からの重要路・エグナティア街道



「映える」ハート型に見える柱の貴台



313年築と分かるモザイク(レプリカ)



街道から伸びる列柱大通り



浴場併設の公衆のお手洗い



ΙΧΘΥΣの文字とそれを組合せた車輪型マーク



完成前に崩落し使用されなかったバジリカ



※ ΙΧΘΥΣとは、「イエス・キリスト・神の子・救い主」(Jesus Christ, Son of God, Savior)というギリシャ語の頭文字を取ると「ΙΧΘΥΣ」となり、「さかな」の意味になり、魚がキリストを象徴するモチーフとなりました。

昼食のメインは大盛りのシーフード



遺跡を後にし、昼食レストランがあるドラマの街へ。Rodstamo レストランにて昼食。メニューはサラダとスープ、エビ・イカ・イワシとアンチョビのミックスグリル、またまた甘いラヴァニケーキ。ギリシャにはラヴァニケーキ以外は存在していないのでしょうか?と思うくらい毎回出されます。バルカン半島一帯で知られたケーキですが、ギリシャの名物でもあるのです。

ギリシャとブルガリアの国境は、本来はスムーズに越えられるはずでしたが、ギリシャ側のパスポートスキャンの機械が巧く作動せず、時間がかかってしまいました。宿泊したのはブラゴエフグラートの街外れでしたが、広い通り、建物の佇みはいかにも社会主義国の雰囲気漂うものでした。夕食はホテルのレストランにて。メニューはギリシャ風サラダ、ポークの煮込み、バナナ入りチョコレートケーキでした。

《 ブラゴエフグラート / エゼレッツ泊 》

10日目 9月23日(土) ブラゴエフグラートニニリラ山ハイキングニソフィア 晴れ

本日はリラ山に点在する湖を愛でながらハイキングを楽しむ一日。過去数年ずっと悪天候に見舞われて殆ど歩けていなかったのが心配でしたが、今回はすこぶる良いお天気に恵まれて、ハイキング日和になりました。ホテルの朝食が(我々の感覚では)少し遅い8時だったために、さほど早いわけでもない7時半出発にもかかわらずお弁当の朝食。レストランを開けてくれていたのでコーヒーやお茶を飲みながら巨大なサンドイッチを食べました。

リラ山に着いてみるとバカンスシーズンが終わっている 9 月下旬でしたが、前日が独立記念日であり、週末と合わせての三連休だったためか山上へのリフトが大、大、大混雑していて 1 時間近く並ぶ羽目になってしまいました。案内して下さったガイドさんは足の長いザハリさん。8 時からチケット売り場に 45 分並び、私たちのチケットを購入してくれていました。感謝、感謝です。それならば私たちも時間を気にする必要のない朝食お弁当であったので、もっと早く 7 時出発にすればよかったと後悔してごでした。

リフト乗り場の標高は 1585m で、リフトに 25 分ほど乗った山上は 2100m ほど、500m 標高を上げました。歩き出してすぐはずっと上り坂。標高が高いので息が上がります。最初に見えた湖は下の方に見えるので「下の湖」。なんと単純なネーミングでしょう。多少急坂でしたのでガイドさんはゆっくりと歩いてくれました。下の湖と魚湖の後には「肝臓湖」。形が勾玉のように湾曲しているのでその名がつけました。間近に眺める湖は信じられないくらいの透明度があり、テンションがあがりっぱなしです。7 つの湖をすべて見ようとすると更にドーーーーーンと登らなければならず、体力的にも時間的にも難しいので、その後は足場が悪い上り下りを繰り返しながら進みました。それにしてもどの湖も透明度抜群で大変美しく、もっとゆっくりと過ごしたい思いでした。



最初に左手に見えたのは「下の湖」



しっとり落ち着いた「肝臓湖」



「魚湖」後ほど近くまで歩きます



近寄るとその透明度に感嘆の声



遊歩道の紫の花はリンドウの一種と思われます



絶景の中、最高に楽しめるハイク



右手に見えてきたのは二つの湖がくっついたような「双子湖」。この辺りから岩がちで足場の悪いアップダウンが細かく続きました。思っていたよりもハードな道のりに少し疲れてきました。見えてきた湖は「三つ葉湖」。その後「魚湖」を間近に眺めてようやくリフト乗り場に戻ってきました。いやいや、予想外に大変で疲れましたね。本当にお疲れ様でした。



少々しんどいハイキングでしたが、お天気が良く、湖も景色も大変美しかったので、一服の清涼剤のように多少は疲れを忘れさせてくれました。一生懸命歩き続けましたが、やはり1時間のリフト渋滞が行程に響き、昼食の予約時間からはかなり遅れて到着。温泉の町の、その名も温泉を意味する Geysara にてかなり遅い昼食。メニューはバルカンサラダ(トマトとフェタチーズのサラダでした)、ほろほろに煮込んだポーク、ピスクティーノケーキ(ティラミスもどき)。

ガイドのザハリさん



昼食のメニュー



デザート



疲労困憊でしたが、もう一箇所の観光が残っています。すっかり遅くなってしまいましたが、ソフィア郊外に佇むボヤナ教会の見学です。教会の前でガイドのマリーナさんを待ち、2グループに分かれて限定10分間で教会内部を見学



しました。ここは首都ソフィアの南西郊外、ヴィトシヤ山麓に建つ、時代の違う3つの聖堂が1つになった教会で1979年から世界遺産として登録されています。一番奥から11世紀、2階建ての中央部分が13世紀、手前の入口側が19世紀の建物です。もともとこの場所は王や貴族の別荘地で、ボヤナ教会も11世紀に建てられた王室礼拝堂がもとになっています。1259年、ブルガリア皇帝の親戚にあたる貴族カロヤンが、その礼拝堂の隣に、新しい礼拝堂を増築し壁画を描かせました。1845年になるとさらに西に部屋が増築されました。マリーナさんの案内は北マケドニアのスコピエ郊外の聖バンテレイモン教会の時の説明を彷彿と



させるもので、表情のある人々が描かれていて、それはイタリアのルネッサンスよりもずっと早い年代にここブルガリアでは描かれていた、というものでした。確かに表情も衣服のデザインも、クリムトを彷彿とさせるような、一般の宗教画では見られない生きいきとしたものでした。

左の写真はビザンチン帝国の皇帝夫妻の姿。教会に施政者夫妻の姿が描かれるのは珍しいそうです。右側の、王のいとこ夫妻の絵では、この教会を聖ニコラウスに捧げている場面が描かれています。お妃様の衣装は現在の感覚で見てもとてもお洒落です。他に聖ニコラウスの生涯が18の場面で描かれていて、

お金をプレゼントする事でユダヤ人商人の窮地を救ったという、サンタクロースの元となる逸話も描かれていました。これにて本日の観光は終了です。夕食はホテルでビュッフェ。ここまで来ると観光客も随分増えてきて団体専用の宴会場での食事でした。味は……。本日は早朝から、そして長いハイキングでした。大変お疲れ様でした！

《ソフィア / ラマダ・パイ・ウィンダム ソフィアシティセンター泊》

11日目 9月24日(日) ワイニリラの僧院ニソフィア(市内観光) → イタプアル 曇りと雨

本日はよいよ最終日。リラの僧院とソフィア市内の見学後は空港に向かわなければなりません。寂しい限りです。ソフィアから110km離れたリラの僧院までは約2時間、昨日走ってきた道よりもっと南の山中に向かいました。



ブルガリア正教の総本山であるリラの僧院は、10 世紀中ごろ修道士イワン・リルスキーが隠遁の地として選び、小さな寺院を建てたのがはじまりとされています。やがて、60 年にも亘って生活をしていた彼を慕って多くの信者や僧侶が集まってきて、中世の宗教文化の中心となりました。イワンは 946 年にこの地で亡くなりました。後の時代になると大規模な施設に発展し、国から保護されるほどにまでなりました。ブルガリアがオスマン帝国の支配下に置かれた時代においても修道院はその信仰を認められており、ブルガリア正教の精神や文化などは脈々と伝えられてきたと言わ

れています。

修道院の総面積は 8800 m²。高さ 22m の石壁が修道院の中庭、生神女誕生教会堂、フレリヨの塔、博物館、居住施設の建物を囲んでいます。修道院には 300 の部屋があり、その内 100 が修道士の居住部屋です。19 世紀に修道院は大規模な火事により焼けてしまった為に大きく損壊しましたが、1834 年～1837 年にかけて修復工事により再建され、それまでの古い教会堂があった場所には現在の生神女誕生教会が建設されました。

朝早くソフィアを出発したにも関わらず既に大勢の観光客が僧院を訪れていました。敷地を取り囲むように建てられた僧坊には、かつては全国から僧侶が訪れ修行していたようですから食堂、厨房、図書館も相当な広さがありました。マリナさんの話によると、その厳しい規律の中での生活のために現在ではリラに修行に来る僧侶は少なく、現在はたった 6 名だけだそうです。僧坊の一部は宿坊となっていて一般人が利用できるため、西遊旅行でも過去にここに宿泊していた事がありました。



フレリヨの塔は 14 世紀にセルビアの領主フレリヨ・ドロゴボラの寄進により建造された鐘塔です。オスマンの支配下にあった頃は要塞や修道士の住居として使われ、19 世紀の大火に見舞われた際、中庭にあった塔は唯一火事の被害を逃れたので 14 世紀そのままの姿を今に伝える貴重な存在となっています。

中心となる生神女誕生教会は、天井、壁、柱、ドーム、梁に至るまで天然色を多用した極彩色のフレスコ画が描かれています。イエスと 12 使徒や聖人などの聖書の登場人物から、ブルガリアの聖人や庶民、普通の教会では考えられない悪魔や餓鬼、龍、怪魚なども描かれています。見ているとなかなか面白いです。



半円形のフレスコ画で横たわっているのは修道院の創設者イワン・リルスキー。彼のの死の場面



画面下の飢えて物乞いをする人を無視して飲食する裕福な男性が、罰を受けて画面左のように悪龍に食われる、の図

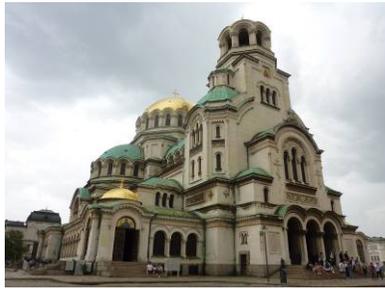


最後の審判の図。画面中央では生前のその人の行いを天秤で計り、画面左下は天国に向かう人々、右は地獄に連れて行く邪鬼が待ち構えている

教会の内外を見学した後は建物内部に立ち入れる唯一の方法として有料の博物館展示を見学しました。ブルガリア国内あちこちの民俗衣装や部屋の再現を見て回りました。建物の 4 階から僧院の全景が見渡せてとても良い眺めでした。しかし、ここでも撮影は禁止でした。係員の女性の目を盗んで上手に撮影できた方はいらっしゃいましたか？

リラの僧院を後にし、近くのレストランで昼食。ツアー最後のお食事です。メニューは豆スープ、リラ川で養殖されたマス、本場のブルガリアヨーグルトでした。昨日の朝食が急遽お弁当になってしまったお詫びにワンドリンクをサービスさせていただきました。お腹がいっぱいになったところでソフィアに戻ります。2 時間かかるのでちょうど良いお

昼寝タイムとなりました。



ソフィア市内観光はすべて徒歩観光でした。ブルガリア最大の正教会・アレクサンドル・ネフスキー大聖堂の前でバスを下車。この教会は古いものではなく、19世紀後半にブルガリアをオスマン帝国の支配から解放する手助けをしてくれたロシアに感謝して建てられた教会です。アレクサンドル・ネフスキーは13世紀のロシア（正確にはその頃はまだロシアではなく、ノヴゴロド公国→ウラジミール大公国）の英雄です。巨大で豪華なもの大好きなロシアにぴったり、と嫌味を込めてマリナさんは説明しました。確かに今まで見てきた長い歴史と信仰が息づく教会とは全く雰囲気は違いました。

大聖堂から日本ブルガリア友好40周年を記念した桜の木を見て、聖ソフィア教会へ。ここはブルガリアで最も古い教会の一つで、4世紀の教会跡地に6世紀に今の建物が建てられました。丁度大粒の雨が降り出したので雨宿りを兼ねて入ってみると赤ちゃんの洗礼式が行われていてラッキーでした。そういえば、教会内には知恵の女神ソフィアではなく、殉教者ソフィアの絵があり、娘の名前が分かりませんでした。love 愛ちゃん、hope のぞみちゃん、faith 信仰ちゃんだと判明。続いてクリーム色の外壁の旧王宮（現在は国立美術館と国立民族博物館）、噴水広場前の劇場、

友好記念の桜はまだまだ若木でした



聖ソフィア教会 一部古い箇所は6世紀



劇場 結婚式の撮影をしていました



大統領官邸（衛兵交代式は毎時0分に行われます）、コンスタンティヌス帝が建設したロトンダ（霊廟）を基礎にした聖ゲオルグ教会、旧共産党本部（昔は一番上に共産党のシンボル赤い星がついていました。ロシア、中国などの共産圏ではよく見られる建築でブルガリアが社会主義国であった事が一目でわかります）、

大統領官邸と衛兵さん エリート警察官



聖ゲオルグ教会（手前はローマ時代の遺跡） 旧共産党本部 「いかにも」の建物



セルディカの地下遺跡（セルディカはローマ時代のソフィアの名前。ローマ時代の遺跡を地下の連絡通路にそのまま保存しています）などを見て回り、地上に出て、聖ペトカ地下教会（オスマン帝国代にはモスクより高い教会の建設は出

来なかったため地面の低い場所に建築。中世には周囲に馬具工房が集まっていたため「馬具工の聖ペトカ教会」と呼ばれます)、聖ネデリヤ教会(アレクサンダーネフスキー教会ができるまで総主教座が置かれていました)とバーニャ・バシモスク(生きたモスクとしてはソフィア唯一のモスク。バーニャは「お風呂」の事で、近くに公共浴場のハمامがあったのでこの名前がつきました)を少し離れた所から見て徒歩観光は終了。お疲れ様でした。雨が止んでくれて良かったです。この後は1時間のフリータイムをとり、歩行者天国をブラブラしました。

正式には「馬具工の聖ペトカ教会」



バーニャ・バシモスク



聖ネデリヤ教会



フリータイムが終わり、楽しかった(事を願います)ツアーの日程も終了しました。空港でマリーナさんと6日間共に過ごしたペターさんとはお別れです。度々道を間違えハラハラしましたが、運転技術は素晴らしく、何より人柄の良い運転手さんでした。お世話になりました。

ターキッシュ航空のチェックインは2時間前からでしたので40分ほど待つことに。その間に自動チェックイン機で通路側座席を確保しようと試みましたが、残念ながら残っていたのは真ん中の席ばかりでした…。

既に45分の遅延がモニターに表示されていたが、結局更に20分遅れの22:20発に表示が変わり、結局1時間半近く遅れて離陸しました。



ターキッシュ・エアラインズ1030便 ソフィア空港 22:45頃→→イスタンブール空港 00:25頃
《 機中泊 》

12日目 9月25日(月) イスタンブール→→ 羽田空港

到着も1時間半遅れてしまいましたが、往路のような長い長い移動が何故もなく、感覚的には差し引き1時間くらいの遅延と同じでしょうか。ここで引き続きトルコに滞在する3名様とはお別れとなりました。

ターキッシュ・エアラインズ1003便 イスタンブール空港 2:45頃→→羽田空港 19:20頃

羽田便はほぼ満席で、特に真ん中席の方々はしんどかったですが、長いフライトからやっと解放されました。12日間の旅、お疲れ様でした!

この度はご参加いただきまして有難うございました。
なかなかのハードスケジュールでしたが、お蔭さまで元気に
楽しくツアーを終了する事ができたと思います。
皆様のご協力を深く、深く感謝します。
旅日記が旅の思い出に、写真整理に少しでも役立てれば幸いです。
暑いと思って帰ると朝夕は秋の気配が感じられる涼しさ。
短い間ですが、暑さ、寒さから解放される素敵な季節の到来です。
どうぞお体に気をつけて日本の秋を満喫しつつお過ごしください。
どこかの空の下でまた会う日までお元気で!!